

自己分析・適職発見診断ツール
R-CAP

入学すぐの適性診断テストを 文理選択の一助に

— 福島・県立 福島高校 —

取材・文／永井ミカ

右から
2学年主任
武田浩先生
2学年
佐々木珠恵先生

School Data

生徒数958人(男子553人・女子405人)
普通科24学級
進路状況(2013年度)／大学進学64%・その他36%
福島県福島市森合町5-72
TEL 024-535-2391
URL <http://www.fukushima-h.fks.ed.jp>

福島県随一の進学校として名高い県立福島高校。SSH(スーパーサイエンスハイスクール)としての活動も盛んで、地域の科学教育の中核的拠点である「アSSH」にも指定されている。2011年の東日本大震災を受け、校舎の一部が使えなくなるなどの被害に遭ったが、今年度は新校舎も完成予定。この経験をも学びに生かし、奮闘し続けている。

文理選択までの 時間と情報が足りない

「多くの学校が同じ悩みを抱えているのかもしれませんが、文理選択の時期が早く、生徒が十分に考える時間や材料が不足していると感じていました」と佐々木珠恵先生。毎年4月に入学した1年生は、中間考査の結果も待たず6月に進路希望を提出しなくてはならない。2年生からの文理別クラス分けに間に合わせるためとはいえ、同校では以前から、生徒や保護者からとまどいの声が上がっていた。

「4月から6月までの短い期間に、どのように生徒の気持ちをもっていくか。どんな情報提供ができるか。客観的な指標を出せないか」……などと悩んでいたという佐々木先生。「昨年、3年生の担任をしていたときに、とある生徒の言葉にハッとした。その生徒は、3年生で受験校を最終決定するときに、1年生のときに受けた適性診断テストの「R-CAP」の結果を参考にしたと言ったそうだ。

客観的データと資料を 進路を考える材料に

「15歳の文理選択は難しい。『どちらにする?』といきなり問いかけるだけでは無責任」。昨年、1学年主任を務めた武田浩先生も、以前からそう考えていた。そこで、学年団で話し合い、昨年度から文理選択に向けての動きを早めた。

まず、生徒は入学早々「R-CAP」のテストを受け、4月下旬に診断結果を受け取る。その直後のPTA総会で保護者にも、文理選択や「R-CAP」について説明し、早くから家庭で話し合う機会をもつてもらおうという流れである。

「大人の都合で時間も何もかもピタッと決まっていますが、それをそのまま生徒にぶつけたらプレッシャーを感じてしまします。考える時間を少しでも多く与える。そして、わからないならわからないでもいいよとひと言添える。そんな指導心がけました。診断結果は各クラスで返却しましたが、生徒たちははていねいに見ていま

した」と武田先生は言う。「R-CAP」の結果には仕事と学問のカタログも付いているため、価値観、興味、志向から、具体的な進路を考える助けにもなる。

5月の二者面談の際、診断結果を参考にしたクラスもある。「R-CAPは教員の生徒理解の助けにもなりました」と佐々木先生。「入学してすぐのテストなので生徒が、素の状態。もしかしたら、本当の希望だったり、本当の適性が顕われるのかもしれない」。

6月に1回目の進路希望調査を提出。その後、オープンキャンパスや各種セミナーなど、生徒に進路を考えるための情報を提供する。これらを受けて生徒は11月に文理選択の最終希望を提出。ここ数年、文理のクラスは半々ずつという傾向が続いているそうだ。

「教員がどんなアドバイスをしようと、最終的に決めるのは本人。R-CAPの客観的なデータは、迷ったときに自己を振り返ったり、初心の自分に戻ったりできる場所なのかなと感じています」(佐々木先生)。

■ 文理選択までの流れ(1学年)

4月	入学式
	「R-CAP」実施
	進路指導主事による文理選択ガイダンス
	「R-CAP」診断結果返却
5月	PTA総会
	保護者面談(希望者のみ)
	二者面談
6月	東大・一橋大・東工大見学(希望者のみ)
	『文理・科目選択応援BOOK』配布
	進路希望調査提出①
	学年部会総会(保護者対象)
7月	医学部志望者講演会
	リベラル・ゼミ開講(6~1月、希望者)
	最先端学問研究会
8月	東北大学オープンキャンパス(全員)
9月	各大学オープンキャンパス(希望者)
10月	進路研究セミナー
11月	二者面談
	進路希望調査提出② 2学年選択科目決定

リベラル・ゼミでは哲学・政治・文学などの専門家や職業人による講演と、生徒の討議、発表を通して「総合知」を養う